

## SGH アソシエイトから指定校へ

本校は平成 26 年度スーパーグローバルハイスクールアソシエイト校であり、平成 27 年度には同指定校となりました。平成 26 年度の申請時に指定校とならず、アソシエイト校となったことは、同時に指定校の様々な取り組み・活動を参考にしながら、自校の今後の取り組みを再考する時間を確保できたことなど良い点も多くありました。特にアソシエイト校として活動しながら、次に指定校を目指そうとする主体的な動きが生徒間から起きたことが幸いでした。本校生徒が「自分たちこそがスーパーグローバルにふさわしい活動をしよう」という意志をもって活動に意欲的に臨んだことは、自発的に研究課題が提出されたことにも象徴されており、その一部は 27 年度の課題研究として継続されています。自発的に海外に研修に出かける生徒もアソシエイトの時期を含めて毎年増加傾向にあります。2013 年(南アフリカ ヨハネスバーグ)・2014 年(アイルランド ダブリン)・2015 年(タイ バンコク)と継続して生徒が参加している「One Young World Summit」や、各種の海外ボランティア研修等には、生徒が自主的に応募して参加しています。後期課程における 1 年間の長期留学も毎年約 20 名が出るようになりました。本校が平成 27 年度に指定校となったこと、また 27 年度の取り組みと活動は、26 年度のアソシエイトの時期やそれ以前からの生徒の活動の積み上げの上に成り立っています。

## SGH 事業を通じて目指す 3 つの「力」

### SGH 研究開発構想名

### 「多文化共生社会の実現を支える組織力・対話力・実行力の育成」

本校が SGH 事業を通じて育成をめざす「組織力」「対話力」「実行力」の三つの力は、いずれも本校が開校以来 9 年間掲げてきた教育目標や育てたい生徒像と重なるものです。本校は前身校の帰国生教育や本校での IB 教育を通して長く培ってきたノウハウを元にして、さらに高度で充実した「グローバル化社会に対応する力」を育成しようとしています。また現在本校には帰国生や外国籍の生徒が 4 割、日本で学校教育を受けてきた生徒が 6 割在籍しています。彼らは日常的にその区別を意識して生活しているわけではありません。国籍も多様で母語もさまざまですが、それが日常だからこそ、生徒たちは普段から「多文化社会」を体験することができ、そこで必要となる力を身に付けることができると考えています。

本校が SGH 事業を通して育成を目指す「組織力」「対話力」「実行力」は具体的には以下のように想定しています。

「組織力」― 課題解決のために、人・知識・技術を構成・組織し、物事を動かす力

「対話力」― 課題解決のために関わる人・組織等と対話し、合意形成を為す力

「実行力」― 課題解決のために実際にアクションを起こし、解決に導く力

これらの力は、本校の基本的な姿勢に関わるものであると同時に、これからのグローバル化社会において、異なる他者と共に生きていくために必ず必要とされる力だと考えています。これらは新しい学習指導要領の基盤となる「育成すべき資質・能力」の三つの柱に結びつくものでもあり、また OECD が掲げるキー・コンピテンシーの三つのカテゴリー（①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力、②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、③自律的に行動する能力）とも関連付けられるものです。

生徒は後期課程 3 年間（あるいは中等教育の 6 年間）を通して、課題研究を中心とした SGH の活動を行うことで、これらの力を身につけ、伸長させていきます。

## 本校 SGH 事業のイメージと課題研究テーマ

### 多文化共生社会の実現を支える組織力・対話力・実行力の育成

組織力：課題解決のために、人・知識・技術を構成・組織し、物事を動かす力  
 対話力：課題解決のために関わる人・組織等と対話し、合意形成を為す力  
 実行力：課題解決のために実際にアクションを起こし、解決に導く力



本校の SGH 課題研究においては、次の 3 つを研究の大テーマとしています。これら的大テーマもアソシエイトの時期に生徒が主体的に研究していたことを中心に設定されました。つまり、テーマ自体が「生徒の意識」なのです。生徒はこの大テーマに即して、国際社会における現在・将来の問題について、独自に研究課題を設定しています。

**リスク** リスクのない社会はありません。これから先に新たに生じるリスクもあります。それらを完全になくすことはできませんが、リスクをいかにとらえ、コントロールし、それらに備えた強靱で柔軟な社会をどのように築いていくかを、課題研究を通して考えます。

**葛藤と軋轢** 異なる他者と共に生きる世界では必ず葛藤や軋轢が生じます。地球上で起こっている紛争や衝突はそれらが具現化した姿です。しかし葛藤や軋轢を乗り越えた先には新たな可能性が開けるかもしれません。葛藤や軋轢を超えて新たな平和的社会を築く道筋を、課題研究を通して考えます。

**教育** 世界で起こっている多くの課題の解決方法として共通して挙げられるのは教育です。しかしその教育自体が十分でない国や地域が多くあります。また、既存の教育にも新たな形が必要とされています。教育というテーマを通して、多くの仲間と共に生きられる社会の構築について考えます。

## 課題研究

地球規模の課題解決に付随する大テーマとして「リスク」「葛藤と軋轢」「教育」を掲げ、それぞれに関わる具体的課題を生徒自身が設定し、研究を進めています。

「リスク」を主軸とした研究は、「リスク社会」に組織で立ち向かえる能力を中心的に育成することを目指し、多様なリスクを分析し、それに対応するための複合的「知」のチームをどのように構成するか、またそのチームでどのようにリスクに対応するかを生徒自身が考える課題研究を想定しています。

「葛藤と軋轢」を主軸とした研究のキーワードは「フォビア（嫌悪）」です。「フォビア」はなぜ生まれるのか、それを超えて他者と対話し、共通の課題に向かうにはどうしたらよいかということについて課題研究を通して分析・洞察し、合意形成と平和の実現を可能にする対話力に主眼をおいて育成することを目指します。

「教育」を主軸とした研究は、生徒自身が教育を受けている立場で同世代・次世代の教育に関する課題を考えます。身近なところにアプローチの入口があるため、スモールステップではあっても、研究の成果を実行すなわちアクションにつなげることを想定しています。

**実施方法：**本校後期課程 3 年間を通じて総合的学習の時間（本校では「国際 4～6」）を中心として実施します。

- \* 生徒は（SSH・SGHいずれかを選択した上で）個人あるいはチームでの課題研究テーマを3つの大テーマのいずれかに関連するものとして設定しています。
- \* 課題研究のための調査・研究の機会としての国内外のフィールドワーク・研修を実施しています。
- \* 課題研究支援および課題研究成果発信の場として、また、外部講師を招いての研究支援の場として生徒をファシリテーターとしたグローバルカフェを開催しています。
- \* 大学との連携事業（東京外国語大学との連携）国際交流基金との連携、企業との連携を通して、課題研究の成果としての実践を行っています。
- \* 検証・評価については、研究の質・成果の達成度・実践化の度合い、またそれを通して見えるコンピテンシーの獲得・育成状況を観点化し、指標を設けて評価を行います。評価規準・方法は、校内外機関もその検討・策定に携わることとしています。さらに、課題研究助成獲得および外部評価の場として、選抜コンペティション〈ISS チャレンジ〉を実施しています。

## ISS チャレンジ

本校では、生徒個人および団体による独自の研究活動（課題研究）の奨励を目的とした、「ISS チャレンジ」を実施しています。この取り組みの中で生徒の研究活動の支援をするとともに、研究の過程および成果を審査し、優秀な研究を表彰しています。また、校外の研究発表会の学校代表選考も一部兼ねています。

SGH において課題研究を進めている生徒の多くが ISS チャレンジにエントリーし、課題研究を進めています。

**応募資格：**東京学芸大学附属国際中等教育学校に平成 27 年度在籍している生徒（全学年）。

応募形態は個人・団体は問わないが、個人が複数の研究テーマで応募することは原則認められません。

**実施運営形態：**ISS チャレンジには、2 つの部門（SSH 部門・SGH 部門）を設けています。

生徒はどちらの部門に応募することも可能となっており、各部門の運営・生徒指導のマネジメントは SSH・SGH の担当教員が分担して行っています。

**SGH 部門における研究対象：**グローバル社会の問題に対応した課題研究で、本校 SGH の大テーマである「リスク」

「葛藤と軋轢」「教育」のいずれかに関わるものを対象としています。

学問分野は文理を問いません。

**研究支援：** 課題研究の支援・助言のための外部連携機関や外部支援者の紹介を行っています。

**評価：**

**① 研究計画・研究内容の評価**

研究計画書や研究論文を校内で査読し、数値評価とコメントをつけて生徒にフィードバックしています。

**② 研究計画および内容の外部評価**

ISS チャレンジ SGH 部門では、研究途中で外部評価を受けることを原則必須としています。夏期休業中には学校で外部評価者を招いて「生徒課題研究外部評価会」も開催しました。また、中には大学や企業といった外部連携先を訪問し、課題研究に対する助言・評価を受ける研究チームもみられます（右写真）。



現段階では外部評価も計画や中間の進捗状況に対するものにとどまっていますが、最終的には研究全体の評価も外部評価者に入って頂き、校内と外部の評価者を交えた評価検討会を開くことを目指しています。

**SGH 部門にエントリーしている課題研究の主なテーマ：**

- \* 意味の消費、高校生としてのエシカルファッションの発信について
- \* ネパール女子カ UP プロジェクト
- \* 若者の国際的な視野を広げる新しいアプローチ
- \* 発展途上国における特別支援教育の教材開発
- \* クラウドファンディングを使用した国際協力の可能性の研究
- \* 震災の被害を最小限に抑えるために若者たちがすべきことは何か
- \* サプライチェーンと企業の社会的責の事例についての研究
- \* 被災地の『忘却』に対する高校生による社会的企業の起業に関する探究
- \* Refugee Denials in Japan 日本の難民問題の現状と課題

## 国内交流・国内派遣

### 東京外国語大学 Joint Education Program

今年度から協定を締結した東京外国語大学の Joint Education Program を本校生徒計 11 名が受講。申込は学校でとりまとめ、参加人数の多かった講座については、初日に教員が引率した。

### 関西大学高等部との交流会

SGH 校同士の取り組み状況や情報を交換し、相互の研究を図る。また生徒同士の交流を通して、課題研究への理解の深化を目指すとともに、同じ問題意識を持つ同世代のネットワーク構築を図ることを目的として実施した。



### Global Discussion 2015

現在のグローバル化に関して、経済学を中心とした社会的な視点からの学びの中で、自分たちが将来のグローバル社会で活躍するためにどのような能力が必要なのか、名古屋大学の留学生と一緒に考えることを目的として実施した。2 日間にわたり、学校をミックスしたグループ（4～5 名）単位でテーマに基づいたディスカッションを行い、最終的にグループの考えをプレゼンテーションした。グループ活動の他、名古屋大学の教授陣による講義も実施された。本イベントは生徒のグループ活動を含め、原則英語で行われた。



### 駒ヶ根訓練所 青年海外協力隊体験入隊研修

駒ヶ根訓練所は独立行政法人国際協力機構(JICA)が行う、海外ボランティア派遣事業(青年海外協力隊・シニア海外ボランティア)の派遣前訓練を主として行う施設である。発展途上国援助に関連のある課題研究を行う本校生徒に対し、途上国での活動手法を学び国際協力への理解を深めることを目的とし、駒ヶ根訓練所が行う青年海外協力隊派  
Copyright © Copyright © 2015 Tokyo Gakugei University International Secondary School. All rights Reserved.

遣前訓練の模擬体験を2泊3日で行った。青年海外協力隊は採用後、訓練所において70日間の派遣前訓練を行う。派遣前訓練ではボランティア事業、国際協力、異文化理解に関して学習するとともに、赴任先の国の語学や赴任国事情に関する講座を受講する。これに不ならい、このたびの研修では生徒達が今後バングラデシュに派遣されるという想定の下、ベ  
ンガル語講座およびバングラデシュ任国事情、途上国での安全講座・健康管理講座などを受講した。



## 海外交流・海外派遣

### UCL Grand Challenge Seminar

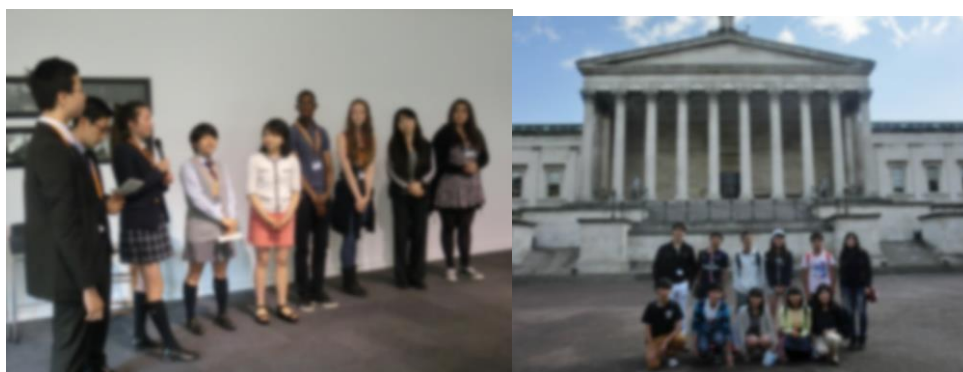
今後世界を担う日英の高校生・大学生が国際社会のリーダーとなる資質を養うことを目的として開催されるプログラムを活用し、UCLが大学として取り組む社会課題についての知識を深め、文化・背景の異なる他者との対話を通して、自己の課題研究の充実を図る機会として参加した。

UCLにては主としてUCLの教授陣による講義の受講や・UCLの学生や現地校高校生との交流（ディスカッション・プレゼンテーション）を行った。また、ケンブリッジにおいては、ケンブリッジの教授陣による講義受講や研究室訪問を行った。

UCLにおけるグランドチャレンジの大きなテーマ(大学として設定している研究)は

・ Global Health ・ Sustainable Cities ・ Intercultural Interaction ・ Human Wellbeing

の4つであるが、他に英国の学生が知りたいというトピック（日本の伝統的な祭り・結婚式・野球・皇室・英国人へのイメージ・地震のための避難訓練・自衛隊の戦争参加等）についてもコメントできるよう事前準備を行っていった（UCL在籍の本校卒業生を迎えての事前学習会を開催）。



## Global Café

### 4月10日（金） 第1回 Global Café 実施



テーマ「～Hateとphobiaを超える！～ ISS生 東アジアをゆく」独立行政法人国際交流基金が主催する高校生「ふれあいの場」訪問事業に参加し、中国にて現地の生徒と交流した生徒（6年）と、韓日交流エッセイ・フォトコンテスト 日本語エッセイ高校生部門の優秀賞受賞者として韓国を訪問した生徒（6年）が、それぞれの訪問についてプレゼンし、参加した生徒達と情報共有や意見交換を行った。

### 6月22日（月） 第2回 Global Café 実施

テーマ「梅と桜 今日台関係を考える」

台湾へ研修旅行に出かけた生徒（6年・4年）、二人の経験とそこで感じた日台の関係について、「台湾をどう思う？」という問いをもとに、集まった生徒とディスカッションを行った。



### 7月10日（金） 第3回 Global Café 実施

テーマ「子どもの権利とジェンダー差別」映画『Girl Rising～私が決める、私の未来～』上映



「ネパール女子カ up プロジェクト」というテーマに取り組んでいる6年生生徒のSGH 課題研究の一環として行った。公益社団法人プラン・ジャパンの協力を得て映画『Girl Rising～私が決める、私の未来～』を鑑賞した後、ワークショップ型で生徒同士のディスカッションを行った。性別・年齢を問わず「自分たちの生きる社会の問題」として捉えようとする姿勢が見られた。

### 7月23日（木） 第4回 Global Café ×国際 A「国際協力と社会貢献」講座 実施

本校教諭が担当している国際 A（本校独自の総合的学習）の講座との共催で実施。ゲストスピーカーとして一般財団法人ジャパングィング事務局長の宮本氏を招き、ファンドレイジングとは何か、またクラウドファンディングで何がなせるのかなど、実際的な話を聞き、現実社会の厳しさ、かつ社会貢献と資金の関係性について理解する機会とした。

### 12月17日（木） グローバル&サイエンスカフェ 実施

テーマ「課題研究とは」6年生から3年生全員へ

新たに後期課程（高校課程）に入る生徒達へ、研究を進めていくための情報を提供。「UCL 海外研修と課題研究の関わり」、「ネパール女子カ UP プロジェクト」、「画像解析と表計算を用いた運動解析ツールの開発」という研究課題に取り組んできた6年生より、各自の課題研究プロセスやマインドを紹介し、下級生へのアドバイス機会とした。

## 12月17日(木) 第5回 Global Café 実施

テーマ「UCL Grand Challenge～世界が抱える問題って、どうやって解決するの?～」



7月21日～29日にかけて、英国で行われたUCL グランドチャレンジセミナーに参加した生徒3名によるプレゼンテーションと、参加生徒とのディスカッションを行った。

## 12月22日(火) 第6回 Global Café 実施

○国際移住機関職員 仲佐かおい氏による講演

テーマ「国際移住機関 International Organization for Migration の仕事から見える世界」

本校生徒の課題研究に資する機会として提供。国際支援機関の職員である仲佐氏にアフリカ諸国が抱える「リスク」「葛藤と軋轢」(いずれも本校課題研究の大テーマ)に関わる内容を講演していただき、生徒が現実的かつ時代に即応した知識と情報を獲得できる機会となった。



今年度今後の Global Café 予定 (2016年1月以降)

1月 第7回 Global Café 「とびたて留学 J A P N」2015年参加生徒主催 (予定)

2月 第8回 Global Café 「プログラミング」本校3年生主催 (予定)

3月 第9回 Global Café パラリンピアンによる講演 (予定)

第10回 Global Café 「起震車体験～災害を考える～」本校5年生主催 (予定)



## 高大連携

生徒たちは課題研究を進める過程で、自分の研究と関連した研究者から支援を得たり、大学が実施した専門分野を深めるための研修プログラムなどに参加してきた。この項ではそれら本校と大学との連携について報告する。

### ●東京外語大学 Joint Education Program

東京外語大学の講義を一般聴講生として開放するものであり、夏期と冬期の2回開催された。本校は東京外語大学と中大連携協定を結んでおり、外語大 JEP にも協定校の生徒として参加した。開講された講義は以下の通りである。

夏期

1. 科学としての外国語教育学入門
2. 1945年以降の英国とヨーロッパ 問題を抱えた関係史／日仏間における知の双方向性と受容過程
3. ダイナミック・アジアⅠ：平和と紛争に関する視点の多元化
4. ダイナミック・アジアⅡ：東南アジア政治をどう捉えるか

冬期

1. ポストコロナリズムと日本の近代

### ●外部評価

生徒たちが進める課題研究の計画・内容の精査を行うとともに、専門的見地からの助言を得て研究の充実を図ることを目的として外部評価を行った。高大連携として大学の先生方をお願いしたケースが多いが、実務に近いところでの専門的見地からの評価を求めて企業や官公庁に評価を依頼したケースもある。以下の表は2015年8月29日に本校で実施した外部評価会における連携協力者の一覧である。

外部 評 価 者	東京学芸大学男女共同参画推進室 及川英二郎先生・倉持清美先生
	東京学芸大学附属特別支援学校 吉田友紀先生・木村有里先生
	株式会社帝国書院 編集部 ニューメディア室 知名龍徳様
	東京学芸大学附属世田谷中学校 社会科教諭 秋山寿彦先生 他1名

このほかにも東京海上日動火災保険、ユーグレナ、Yahoo!Japan、練馬区防災課、JPX 等にご協力いただき、今後の継続的な支援ネットワーク構築の契機となった。